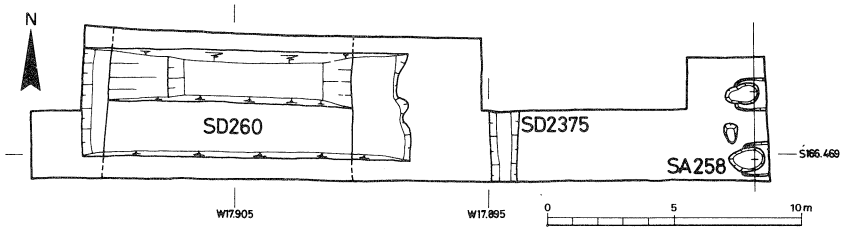
藤原宮第23－5次調査

（昭和54年3月～昭和54年4月）

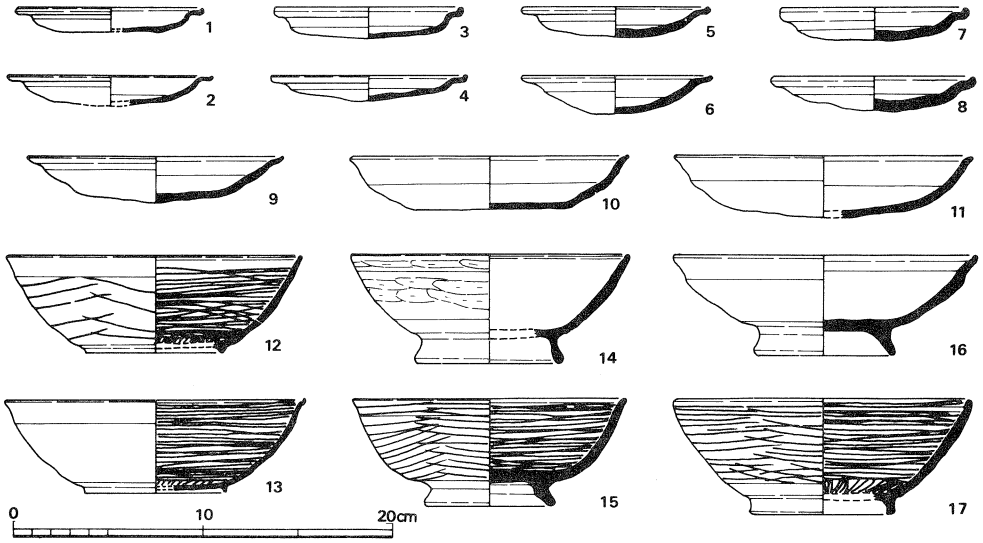
調査地は藤原宮大極殿の西方約450 m，縄手池の北方約160 mにある水田で，この地区は，藤原宮西面大垣と外濠の想定位置にあたる。調査区の層位は上から耕土，床土，灰褐色粘質土，黄褐色粘質土となり，地表下約1 mにある黄褐色粘質土の上面で遺構を検出した。検出した主な遺構には，藤原宮の西面大垣SA258，外濠SD260，南北溝SD2375がある。

西面大垣SA258は調査区の東端にあり，南北方向1間分を検出した。柱掘形は一辺約1.3 mで，柱は西側に抜き取られている。柱間を復原すると約2.65 mとなり，他の地区で確認されている大垣の柱間とほぼ一致する。外濠SD260は，当初は幅10 m，深さ1.9 mに掘られた素掘りの濠であるが，数度の改修を経て最終的には，幅8.8 m，深さ0.8 mになっている。濠の堆積層は4層に大別でき，濠から多量の土器のほかに瓦，銭貨（神功開宝，延喜通宝），土製品（土馬，ミニチュアの韓竈），金属製品（帯金具，鉄釘），木製品，馬骨などが出土した。なお，SD260とSA258の心々距離は20.7 mである。SA258とSD260の間には，南北溝SD2375がある。幅1.2 m，深さ0.4 mの素掘りの溝で，SA258との心々距離は約9.7 mである。藤原宮の東面大垣と外濠との間にも同様の南北溝を検出しており，SD2375も藤原宮に関係するものといえよう。この他に，南北方向の小溝を検出したが，いずれも中世以降である。

出土遺物には瓦塼類，土器，土製品，木製品，金属製品，石製品，銭貨と馬



藤原宮第23－5次調査遺構配置図（1：300）



出土土器実測図

骨，植物の種子などがある。外濠ＳＤ260から出土した土器には，藤原宮期から11世紀後半に至る時期のものが含まれ，土師器，須恵器，黒色土器，瓦器，施釉陶器，磁器がある。このうち瓦器は最上層からのみ出土した。図示したものは出土量の大半を占める平安時代の土器である。１～11・16は土師器，12～14は黒色土器Ａ類，15は黒色土器Ｂ類，17は瓦器である。17の瓦器椀の内底面には放射状の暗文がある。

今回の調査によって，これまで不明な点の多かった藤原宮の西面外濠・大垣の一部を明らかにすることができた。近年その解明に力をそそいできた東面外濠・大垣地区と比較して，西面外濠には若干の特色がみられる。すなわち，大垣からの距離には大差ないものの，西面外濠の幅は東面外濠の約２倍の10mとなっていることや，東面外濠が平城遷都の直後に埋没したと考えられるのに対して，西面外濠は，一部改修されながらも11世紀後半まで水路として機能し続けていることである。これらの特色は，西面外濠が単なる宮城区画の濠としてだけでなく，宮造営当初から基幹水路の一つとして位置づけられたことと，平城遷都後にこの地域周辺に営まれた奈良・平安時代の集落でも水路として踏襲されたことを示している。そして，外濠が埋められた11世紀後半以降，周辺の土地利用は根本的な変革をとげたといえよう。